

書評

野村総一郎, 中村 純, 青木省三, 朝田 隆, 水野雅文 シリーズ編集

吉野相英 編

《精神科臨床エキスパート》

てんかん診療スキルアップ

中里信和

てんかんの有病率は約1%であり、医療関係者のみならず一般社会の誰もが知る病名である。しかし、一般社会のみならず医療関係者の多くが、これほど誤解し偏見を持つ疾患も少ないのではなからうか。ありふれた疾患に誤解と偏見に満ちた医療が施されたのでは、患者や家族はもちろん、医療費を支える国民全体にとっても大きな損失である。

本書は精神科医のために企画された「精神科臨床エキスパート」シリーズの一つである。「精神科医のための教科書」という位置付けなのだが、てんかんを取り上げたという点に驚いた。日本においては、てんかんは精神科医によって診療されていた時代があった。その後てんかんは神経疾患に分類されるようになり、精神科医の「てんかん離れ」が進んだ。それなのに、あえて「精神科医が持つべきてんかん診療技術の minimum requirement の提供を目指す」という方針は称賛に値する。

私の友人でもある「てんかんに詳しい精神科医」たちは、皆、自らを「絶滅危惧種」と呼ぶ。本書はそんな中でも比較的若手の、いわば「超」絶滅危惧医たちによって執筆されている。各章を読み進めていくうちに、一つ一つの文章の中に「てんかんに詳しい精神科医」たちの強い思いが読み取れた。この教科書は、精神科医だけに読ませるのではもったいない。むしろ、てんかん診療に携わる精神科以外の医師にも読んでもらいたい教科書だと思う。

第1章と第2章は、てんかん発作の症候学と鑑別すべき疾患について書かれている。精神科医の手

による教科書であるから、てんかんと鑑別すべき精神疾患や、てんかん性精神病については、特に詳しくまた整理されている。

第3章は脳波の項であるが、ルーチン記録法の限界についても触れられており、必要に応じて「ビデオ脳波同時記録(による長時間モニタリング検査)」を依頼すべき、との記述は「わが意を得たり」と感じた。

第4章の薬物治療の章では、外科治療についても大きく取り上げられていて、従来の精神科の教科書としては異例であり歓迎したい。

最後の第5章と第6章は、てんかんの精神症状について書かれていて、本書の中でもクライマックスといえる部分である。この部分は、精神科以外のてんかん診療医にぜひとも読んでもらいたい。てんかん性精神病を扱った教科書は古くから数多く存在しているが、本書のそれは一言でいうとモダンである。脳磁図などの最新診断機器の知見が紹介されていることもあるが、精神疾患の概念の変遷にも触れつつ、てんかん性精神病の最新の考え方についての理路整然とした記述が、読んでいてなんとも爽やかなのである。

この本を読み終え、「絶滅危惧種」が再び繁栄することを、心から願う。

(東北大学教授・てんかん学)

●B5 248頁 2014 定価: 本体5,800円+税
医学書院